

シリーズ 森とけもの

(10)

堅果

—森のネズミの冬の食料—

奥村 みほ子

○○ mmとやや小さい。これらのネズミは森林内の果実や種子、昆虫等を食べる。アカネズ

森のネズミにはアカネズミとヒメネズミがいる。彼らは秋に種子を貯蔵し、冬にこれら種子を食べることで有名である。

アカネズミとヒメネズミは日本固有種で、本州から九州に分布しており、成体は体毛が茶色く姿形がよく似ているが、大きさで見分けることができる。アカネズミの頭胴長（鼻先から尾のつけまでの長さ）は八〇～一四〇 mm。一方、ヒメネズミの頭胴長は六五～

ミズキ、アカシデ、カエデなどネズミの食料となる種子を生産する多様な樹木が生えている。このような森で、ネズミは秋から翌春にかけて何を食料として生きているのだろうか？

ミは主に地上性、ヒメネズミは地上だけでなく樹上もよく利用する。アカネズミの方がより植物質なものを食べるといわれている。筆者は、(株)森林総合研究所の安田雅俊博士らとともに、茨城県北茨城市的山あいにあるブナの天然林、小川群落保護林で、これらの森のネズミと樹木種子の豊凶との関係を調べている。

本でも、ブナの種子生産量とネズミの個体群動態の研究は、日本海側にみられるようなブナが優占する森林で行われてきた。そこでは、ブナの種子生産量とネズミの個体数を比較することで、種子生産量の増減がネズミの個体

数の増減を引き起こしていることが明らかにされた。では、我々の調査地のような多種の樹木が生育する太平洋側のブナ林では、ネズミは冬の食料としてブナやその他の多くの種子をどれほど利用しているのだろうか？またどのような種子がネズミの個体数の増加に効いているのだろうか？

ネズミは種子を木の洞や倒木下といった天敵から身を守ることができる安全な場所に運んでから食べる。そのため、野外においてネズミが消費する種子の量（種子消費量）を測ることは困難である。これまでの研究では、実際のネズミによる種子消費量は不明で、單に種子生産量とネズミ個体数の変動パターンを比較し、それらの間の関係を議論してきた。そのなかで、あるいは、生産量に応じて種子を食べるのか、あるいは、特定の樹種の種子を好んで食べるのだろうか

など、明らかにするために、我々はネズミによる種子消費量を測る手法を開発し、長年調査を行ってきた。そしてさまざまな樹種の種子生産量とネズミの種子消費量、種子からネズミが得た栄養の量、さらにネズミ個体数の変動の関係を検討した。その成果の一部を以下に紹介する。

一九九八年秋に林内に塩ビのパイプでつくった人工の巣箱（以下、巣箱）を埋め、ネズミに食料を食べる場所を提供する実験を開始した（図1）。実際にネズミはこの巣箱を利用し、巣箱内に種子や昆虫を持ち込んで食べていた。その際、食べかす（種皮や昆虫の残骸）を巣箱に残していく。時々、餌場としてだけではなく巣として利用することがあった。その場合は巣箱の蓋を開けると巣箱の中はよく乾いた落ち葉で埋めつくされ、ときには、突然、巣の天井が開いたのでうるたん

すの中で一番多かったものは種皮であり、特にブナ類（ブナとイヌブナ）、コナラ、クリ、ハクウンボク、ウワミズザクラが大きな割合を占めていた。ブナ類の種子生産量は年により異なり、巣箱に残された種皮量も豊作と凶

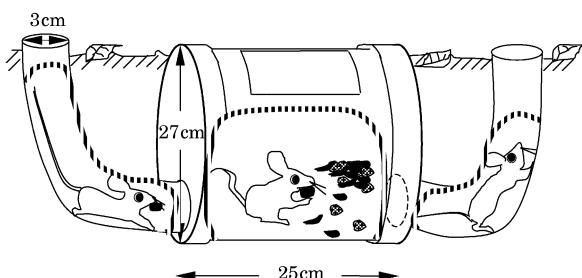


図1 埋設式巣箱（上のふたを開いて内容物を回収する）
注：奥村ほか（未発表）

